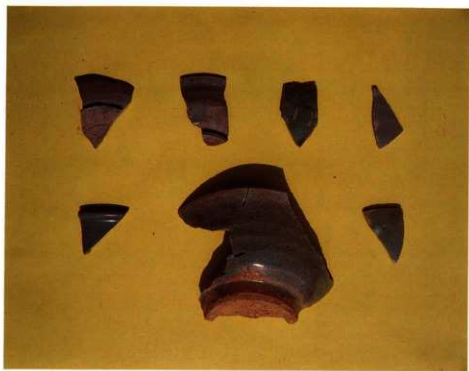


門川町文化財調査報告書第2集

門川町遺跡詳細分布調査報告書



1994.3

宮崎県門川町教育委員会

門川町文化財調査報告書第2集

門川町遺跡詳細分布調査報告書

1994.3

宮崎県門川町教育委員会

序

門川町は、宮崎県の北部にあり、日向の伊東氏の基礎ともいえる門川党の発生の地であり、歴史的に東北の要としての役割をはたしてきました。

海、山の美しくもきびしい自然のふところに抱かれて、門川に暮らしつづけた人々のたゆみない働きによって、現在の、そして未来の豊かな門川町があります。

このような歴史を語るものとして、文化財は、町民の大切な文化的財産です。文化財を後世に残し、歴史を学ぶ資料とするために、その保護・整備をすることは、私たちの責任といえます。

近年、町内でも開発事業が増加してきました。文化財の中でも特に埋蔵文化財（遺跡）は、地下に埋もれているため人知れず失なわれることが考えられます。

この度、遺跡詳細分布調査を行い、門川町の遺跡の状況がわずかですが明らかになりました。今後は、これらの成果をもとにより積極的な保護施策を検討し、推進していかなくてはなりません。

この報告書によって町民の皆様にも門川町の歴史に興味をもっていただくと共に、文化財保護に対するご理解をいただければ幸いです。

今後とも文化財行政につきまして、一層のご協力をお願いいたします。

門川町教育委員会
教育長 松田 壽典

例 言

1. 本書は、門川町教育委員会が平成3年度から平成5年度にかけて、文化庁・宮崎県教育委員会の補助を受けて実施した、遺跡詳細分布調査の報告書です。
2. 本書に掲載された遺跡（埋蔵文化財）は、すべて文化財保護法にいう「周知の埋蔵文化財包蔵地」です。
3. 「周知の埋蔵文化財包蔵地」において、土木工事等を実施しようとする場合には、文化財保護法により、「発掘に着手しようとする60日前までに文化庁長官に届け出る」必要がありますので、土木工事の計画段階から門川町教育委員会社会教育課（宮崎県東臼杵郡門川町本町一丁目一番地・電話0982-63-1140）ないしは宮崎県教育委員会文化課（宮崎県宮崎市橋通東一丁目九番十号・電話0985-24-2111）へ事前に照会・協議をお願いします。
4. 指定文化財については、その指定地内等で開発事業を行なう場合は、宮崎県文化財保護条例、門川町文化財保護条例等に基づく「現状変更許可申請」を行い、事前に許可を得ることが必要です。
5. 埋蔵文化財は、地下に埋もれている性格上、現在未発見で工事中発見される場合があります。その場合は、文化財保護法の規定により「その現状を変更することなく、遅滞なく文化庁長官へ届け出る」必要がありますので、前記と同様に門川町教育委員会または宮崎県教育委員会文化課へ連絡をお願いします。
6. 本書の附図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の25,000分の1地形図を複製したものです。（承認番号）平6九複、第41号
7. 本書及び文化財、埋蔵文化財に関する問い合わせは、門川町教育委員会社会教育課ないし宮崎県教育委員会文化課へお願いします。

凡 例

1. 本書では、指定文化財所在地については青色○で、埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」）の範囲については赤色○で、石碑等については緑色□で示している。
2. 指定文化財の名称は、指定の際の名称である。
3. 遺跡名は、原則として小字名で命名したが、一部については、その地域の通称などによった。また従来の周知の遺跡名については原則として「門川町史」の名称に従った。
4. 地図上の「遺跡番号」は、すべて地名表のそれと一致する。
5. 「遺跡番号」は、大字で区分し1000番台は大字門川尾末、2000番台は大字加草、3000番台は大字庵川、4000番台は大字川内とした。石碑等については、それぞれ「5000番台」「6000番台」「7000番台」としている。
6. 遺跡の所在地は、小字まで標記したが、詳細については門川町教育委員会または宮崎県文化課へ問い合わせして下さい。

7. 調査の組織

平成3年度

調査主体	門川町教育委員会
	栗田 浅則（教 育 長）
	安藤 福松（社会教育課長）
	井川 邦人（同 補 佐）
	太田 民雄（同 係 長）
庶務担当	本田 鈴代（同 主 事）
調査担当	窪田 麗子（同 主 事）

調査補助 高橋 栄一 (同 主 査)
調査指導 北郷 泰道 (県文化課主査)
浜本東海夫 (地元有識者)
永田 勝 (地元有識者)

平成5年度

調査主体 門川町教育委員会
松田 寿典 (教 育 長)
安藤 福松 (社会教育課長)
吉田 博之 (同 補 佐)
太田 民雄 (同 係 長)
庶務担当 野島ふみ子 (同 主 査)
調査担当 窪田 麗子 (同 主 査)
調査補助 中田 嘉蔵、高橋 千善
園田ヒサ子、請関スミ子
津田 恭子、安田喜代美
調査指導 北郷 泰道 (県文化課主査)
谷口 武範 (同 主任主事)

8. 現地における踏査は、窪田が行ない、中田、高橋、園田、請関、安田がこれを補助した。

9. この調査に関する整理作業は、窪田、園田、請関、津田、安田が分担して行った。

10. 本書の執筆、編集は窪田が行った。また写真撮影、実測、トレース等については、窪田が総括して行った。

総目次

I	門川町の環境	1
1.	自然環境	1
2.	歴史的環境	1
II	地名表	3
1.	埋蔵文化財包蔵地等	3
2.	石碑、石仏、祠堂等	5
3.	指定文化財	7
III	主要遺跡概説	8
IV	発掘調査	18
1.	庵川地区	18
2.	南町遺跡KH地区	21
附図 門川町内遺跡・文化財分布図		

挿図目次

第1図	庵川地区調査範囲位置図（5万分の1）	18
第2図	南町遺跡位置図（5万分の1）	21
第3図	KH地点の位置	22
第4図	南町遺跡KH地点の土層図1/60	23

図版目次

図版 1	9
①門川城 (1003) 西からの遠景 ②門川城虎口付近 (東上より見る)	
③門川城南西側空壕の現状 ④門川城東側空壕の現状と壕西側土層面	
⑤新城 (1005) 北からの遠景 ⑥新城空壕 (長谷越) の現状	
図版 2	11
①福寿寺跡 (1006) 丘陵西側の大師堂遠景 ②福寿寺跡北東から見る	
③福寿寺跡石塔群現状 ④福寿寺跡紀年銘のある板碑のひとつ (墨書)	
⑤南町遺跡 (1009) 南側の病院屋上より ⑥南町遺跡発掘調査風景 (昭和63年11月)	
図版 3	13
①落郷遺跡 (1012) ②落郷遺跡出土遺物 (左2点) 城屋敷遺跡 (右1点)	
③土橋遺跡 (1013) ④土橋遺跡出土石斧	
⑤中山古墳 (1015) ⑥中村遺跡出土土器 (門川町史より複写)	
図版 4	15
①庵川窯跡現状 (3002) ②庵川窯跡出土遺物 (底に文字書のある大皿)	
③庵川窯跡出土焼台等焼道具類 ④辰砂による赤砂磁器破片	
⑤庵川窯跡出土遺物 (中皿) ⑥庵川窯跡出土遺物 (小鉢) 左2点	
⑦妙覚寺跡表探磁器破片 右1点	
図版 5	17
①城畑遺跡 (3004) ②笠原遺跡 (4003) 石棺	
③江子日向平遺跡 (4007) 現状 ④同出土石斧	
⑤妙覚寺跡 (4006) ⑥赤木遺跡 (4012) 出土石斧	
図版 6	19
①A地点 ②第1トレンチ土層状況	
③B地点 ④第1トレンチ	
⑤第2トレンチ ⑥第3トレンチ	
図版 7	20
①D地点 ②第1トレンチ	
③第2トレンチ ④第3トレンチ	
⑤E地点、トレンチ状況 ⑥トレンチ状況	
図版 8	21
①AH地点 ②掘削地点土器出土状況	
③磨消縄文土器出土状況 ④掘削地点土器出土状況	
図版 9 KH地点南側土層	23
図版 10	24
①小円礫出土状況 ②石製品 (玉) 出土状況	
③石錘出土状況 ④出土土器 2	
⑤出土石器・石製品 ⑥その他の主な出土土器	

I 環 境

I 門川町の環境

1 自然環境

門川町は宮崎県の北部に位置し、北を延岡市、北方町、南を日向市、東郷町、西を北郷村に接しており、東は日向灘に面している。面積の84%は山岳地であり、三方を屏風を立てまわしたように山々が連なっている。これらの山地より、ほぼ北西から南東に傾斜する地形に沿って町内の河川が流れて門川湾に注いでいる。中でも五十鈴川は最大で、その源流は北郷村にあり、その下流域にわずかな平野が広がり、門川町の中心域を形成している。最も標高の高い地点は、北郷村との境にある仁久志山で、標高705mである。全体としては標高100m程の山地が占めている。平野部においては、標高5～10mの帯が水田として利用されている。平野部に近接した標高50m程度の山地にあつては、やや標高の高い谷（迫）を水田としていているところもある。三ヶ瀬、松瀬などの山間部にあつては標高50m～100m程度の位置を水田、畑地に利用している。

門川町は大部分が四万十層群を基礎としているが、北東部の庵川地区には庵川礫層と呼ばれる地層がみられる。この地層は庵川の新川河口から川に沿って遠見山の西側を南西から北東に斜めに遠見半島を横切っている。四万十層群の上に堆積したもので、その上にさらに尾鈴山石英斑岩がかぶさる。その他、加草、門川、尾末の海岸、河川沿岸に狭い沖積層がみられる。

2 歴史的環境

町内の遺跡については、昭和22年と昭和49年に発行された2冊の「門川町史」によるほかは、発表されたものはなかった。昭和49年発行の「門川町史」（以下にのべる門川町史は昭和49年発行のもの）によると当時知られていた遺跡は古墳・城跡も含めて38ヶ所である。「門川町史」をまとめるにあたって門川町商工水産課が担当となつて石川恒太郎氏（故人）に執筆を依頼し、町内の現場調査にあつては当時、町史編さん担当者であつた牧野義博（現収入役）、内山教彦（現町民課長）、永田勝（現農業委員）氏らも同行した。今回の分布調査にあつては、それによるところが大きかつた。

町内の遺跡の分布は、河川に沿った沖積低地と、平野や河川に突き出した丘陵の先端にみられた。

旧石器時代の遺跡は、「門川町史」によると三ヶ瀬の城ノ塚の南麓で剥片石器が表採されており、同じく三ヶ瀬の入谷山頂から礫器が多く発見されているとある。しかし当時、表採したという遺物は残っておらず、現状では遺物の表採はされなかつた。今後、発見される可能性は十分にある。

縄文時代の遺跡は、後期・晩期は確認されているが、それより古い時期のものは確認

されていない。昭和63年秋から南町遺跡において土地区画整理事業に伴う発掘調査が続けられているが、後・晩期の土器や円礫・石錘がまとまって出土している。遺構の確認がされていないため、遺跡の性格が今ひとつ明らかでないが、集落の一部ではあるようである。今回、西門川の宇登木股^{うとぎまど}というところで、縄文土器片を採集したが、五十鈴支流に張り出したゆるやかな丘陵地に広がる日当たりの良い畑地で、集落遺跡として好条件を備えた立地であった。

また、松瀬の北方町の笠下方面に抜ける道沿いの、五十鈴川支流につき出した丘陵端に立地する畑地から縄文時代の土器片と石核が表採された。この地点では赤ホヤが表土下30～50cm下に見られ50cm～60cm推積している。

弥生時代の遺跡は、鳴子川上流域の中村遺跡以外には確認できていない。五十鈴川中流域、下流域にもあると思われるが、弥生時代と決める資料が乏しい。中村遺跡のものは後期であり、五十鈴川下流域で表採される小土器片も弥生時代～古墳時代にかけてのものである。

古墳時代では、五十鈴川下流域にかつて前方後円墳があったが、昭和17年ごろの耕地整理で消滅してしまったという。現代ではその跡を知る人もなく、古墳があったと思われる地域ではなにも発見できなかった。しかし同じく五十鈴川流域の落郷^{おちごう}というところの畑中に墳丘状に盛土が残っているところがあり、土師器片、須恵器片が表採された。

墳丘のある古墳は、五十鈴川中・下流域の平野部だけでなく河川に突き出た山地の先端の傾斜地にもあったようで、石棺が山中に放置されている例がある。五十鈴川だけでなく鳴子川下流域にもかつて同様の例が報告されている。そのほか、古墳時代の遺跡としては、横穴墓がある。横穴墓は2つの集団があり、一つはコモ田という地区から海岸部の中尾までのびる丘陵の斜面にあったもので、現在は国道10号線などで切断されて丘陵のほとんどが失われている。丘陵のつけ根にあたるコモ田の墓地のある山の東斜面、門川神社のある愛宕山の南西斜面などに、いくつか横穴の埋没したような形跡が見られる。開口しているものもあるが、それらはかつて防空壕として使われていたようである。しかし伝承として人骨や壺、刀があったというものもある。

歴史時代には、門川は「刈田駅」として延喜式に登場するが、駅に関する遺跡は、発見されていない。中世になると、町内全域に山城が築かれるようになる。地名としても城にまつわるものが数多く存在する。またそれに伴い寺院跡も多い。近世の遺跡として庵川窯跡がある。これについてはかつては地元で「朝鮮焼」として知られ、文禄、慶長の役に出兵した高橋元種が帰国の折、連れかえった朝鮮の「シンニョム・カンニョム」という2人の陶工に門川の庵川で窯を開かせたという話が伝わっている。昭和47年に発掘調査が実施されたが、磁器が多数出土し、特に辰砂を用いた破片が数点出土して注目された。

II 地名表

1. 埋蔵文化財包蔵地等

大字門川尾末(1001～)

遺跡番号	名称	所在地	時代	種別	文献	備考
1001	門川町古墳6号	大字門川尾末字千田木	古墳	古墳		横穴
1002	門川町古墳1号	大字門川尾末字コモ田	古墳	古墳		消滅、指定は解除されていない
1003	門川城	大字門川尾末字城山	中世	城館跡	日向記	
1004	城山遺跡	大字門川尾末字城山ほか	中世	城館跡		門川城の附属施設か? 掘切
1005	新城	大字門川尾末字新城	中世	城館跡		
1006	福寿寺跡	大字門川尾末字小堀	中世	社寺跡	日向記	
1007	米良四郎右衛門墓地	大字門川尾末字松尾	中世	墓地	日向記	
1008	古川関所跡	大字門川尾末字新城	近世			
1009	南町遺跡	大字門川尾末字原山ほか	戦国・江戸・古墳	包蔵地		
1010	花畑遺跡	大字門川尾末字花畑	古墳	散布地		
1011	深坪遺跡	大字門川尾末字深坪	古墳	散布地		
1012	落郷遺跡	大字門川尾末字落郷	古墳	散布地		盛土あり
1013	土橋遺跡	大字門川尾末字土橋	縄文	包蔵地		石斧出土(個人蔵)
1014	宮田遺跡	大字門川尾末字宮田		散布地		
1015	中山古墳	大字門川尾末字土有	古墳	古墳		石棺が地表に残る(平石さん)
1016	平田遺跡	大字門川尾末字平田		散布地		
1017	森ノ前遺跡	大字門川尾末字森ノ前	近世	散布地		
1018	城跡	大字門川尾末字竹名	中世	城館跡		
1019	石塔群	大字門川尾末字竹名	近世	墓地		
1020	城屋敷遺跡	大字門川尾末字城屋敷	古墳	散布地		須志器口縁部
1021	コモ田遺跡	大字門川尾末字コモ田	古墳	散布地		
1022	其田遺跡	大字門川尾末字其田	古墳	古墳		
1023	アゼ地遺跡	大字門川尾末字アゼ地	古墳	古墳		
1024	分蘗遺跡	大字門川尾末字分蘗		散布地		
1025	宮ヶ原遺跡	大字門川尾末字宮ヶ原		散布地		

大字加草(2001～)

遺跡番号	名称	所在地	時代	種別	文献	備考
2001	永願寺元寺石塔群	大字加草字受	中世～	社寺跡		
2002	中藪第1遺跡	大字加草字中藪		散布地		
2003	中村遺跡	大字加草字中村	弥生	散布地		
2004	追ノ前遺跡	大字加草字追ノ前	近世	散布地		

2005	丸山遺跡	大字加草字丸山	古墳			出土品は県立博物館
2006	松尾城	大字加草字松尾	中世	城館跡	日向記	
2007	江田城	大字加草字枝ほか	中世	城館跡		
2008	佐々宇津城	大字加草字道ノ前	中世	城館跡		
2009	小内遺跡	大字加草字小内	近世	石塔群		
2010	中蔵第2遺跡	大字加草字中蔵	中世	城館跡		
2011	迫ノ前第2遺跡	大字加草字道ノ前	近世	散布地		
2012	加草遺跡	大字加草		散布地		

大字庵川(3001～)

遺跡番号	名称	所在地	時代	種別	文献	備考	
3001	庵川牧跡	大字庵川字牧山	近世		國田家文書	石垣、土塁	
3002	庵川窯跡	大字庵川字里山田	近世	生産遺跡			
3003	西迫遺跡	大字庵川字西迫	近世	散布地		瓦片	
3004	城畑遺跡	大字庵川字城畑	古墳～近世	散布地			
3005	桜井第1遺跡	大字庵川字桜井	近世	散布地			土鏝一片
3006	桜井第2遺跡	大字庵川字桜井	近世	散布地			

大字川内(4001～)

遺跡番号	名称	所在地	時代	種別	文献	備考	
4001	小松石塔群	大字川内字小松	中世	石塔群	定善寺文書	石斧出土	
4002	神舞遺跡	大字川内字神舞	縄文	散布地			石棺が放置されている
4003	笠原遺跡	大字川内字笠原	古墳	古墳			
4004	赤木石塔群	大字川内字赤木	近世	石塔群			
4005	宇登木股遺跡	大字川内字宇登木股	縄文	散布地			赤木第2地点
4006	妙覚寺跡	大字川内字赤木	近世	散布地			庵川遺跡出土の磁器と類似の磁器破片あり 赤木第1地点
4007	江子日向平遺跡	大字川内字江子	縄文	包蔵地			整地中に石斧出土
4008	城ノ塚遺跡	大字川内字竹ノ下	旧石器～歴史	散布地、城館跡			
4009	松瀬遺跡	大字川内字松瀬	弥生～	散布地			土鏝等
4010	入谷遺跡	大字川内字入谷	平安～	石塔群、土師			旧石器も出土
4011	松瀬第2遺跡	大字川内字松瀬	縄文	散布地			石核を表採
4012	赤木遺跡	大字川内字赤木	縄文	散布地			石斧出土、場所不明、赤木神社の下

2. 石碑・石仏・祠堂等
大字門川尾末(5001～)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	備考
5001	文字塔	門川町尾末字小置		天明5年(1785)	
5002	文字塔	門川町大字尾末字分蔵		天明6年(1786)	
5003	祠	門川町大字尾末字分蔵		延宝8年(1680)	土ノ守神社
5004	庚申塔	門川町中山字堀ノ内		寛政2年(1790)	
5005	庚申塔	門川町中山字堀ノ内		文化3年(1806)	
5006	庚申塔	門川町城屋敷字田淵	庚申石	昭和3年(1927)	
5007	庚申塔	門川町城屋敷字田淵	庚申普	文政6年(1823)	
5008	庚申塔	門川町城屋敷	奉納猿田彦大神守護	不明	
5009	庚申塔	門川町尾末字竹名	猿田彦大神守護	宝暦17年(1767)	
5010		門川町宮ノ原	水神		鳴子川中洲
5011	庚申塔	門川町中尾	猿田彦大神	文政4年(1821)	
5012		門川町中尾	大師像	不明	
5013	庚申塔ほか	門川町中尾		大正6年(1917)	猿田彦大神、不動尊、大師像
5014	庚申塔	門川町中尾		不明	自然石
5015	石塔	門川町中尾	五輪塔	不明	6基
5016	庚申塔ほか	門川町中尾	猿田彦大命	不明	
5017	庚申塔	門川町大字尾末字下納屋	猿田彦大神	文化12年(1815)	
5018	庚申塔	門川町大字尾末字下納屋	拝猿田彦大神 猿田彦大神	安永2年 文化9年(1812)	2基
5019	庚申塔	門川町後向	奉拝猿田彦大神	天保9年(1838)	
5020					
5021	荒神	門川町大字尾末東		不明	
5022	荒神	門川町大字尾末東		安永3年(1774)	
5023	庚申塔	門川町大字尾末東	青面金剛像	安永3年(1774)	黒木庄蔵寄造
5024	庚申塔	門川町大字尾末東	猿田彦大神	文化5年(1803)	
5025	庚申塔	門川町旭町	奉納猿田彦大神	明治31年(1898)	
5026	庚申塔	門川町後向	奉拝猿田彦大命	明治10年(1877)	
5027	庚申塔	門川町上ノ山	猿田彦大神	不明	

5028	荒神	門川町尾東東上ノ山				
5029	庚申塔	門川町後向	猿田彦大神	〇九〇〇末8月吉日		
5030		門川町後向	大師像	不明		
5031	庚申塔	門川町五十鈴	猿田彦大神安齋	享保2年(1717)	他2基あり	
5032	庚申石	門川町五十鈴	方延元申元	寛政1年(1789)		
5033	庚申塔	門川町五十鈴	猿田彦大神庚申宗	天明4年(1783)	2基	
5034	庚申塔	門川町五十鈴	奉拜庚申宗庚申加所	享保13年(1728)		
5035		門川町城屋敷	墓石	不明		
5036	庚申塔	門川町九口	彫像 文字塔	安永1年(1772)		
5037	庚申塔	門川町大池	彫像 文字塔	寛永10年(1633)		
5038	庚申塔	門川町小松	猿田彦神	天保8年(1837)		

大字加草(6001～)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	備考
6001	庚申塔	門川町加草	猿田彦大神	安永4年(1775)	あわせて7基
6002	庚申塔	門川町加草	神像庚申宗庚申加所	元禄15年(1702)	
6003	石塔	門川町加草	五輪塔 板碑	不明	
6004	庚申塔	門川町加草	猿田彦大神	不明	
6005	庚申塔	門川町加草	奉拜猿田彦大神	明治3年(1870)	
6006	庚申塔	門川町加草	青面金剛塔	昭和5年(1930)	
6007	庚申塔	門川町加草大迫	猿田彦命塔	宝暦4年(1754)	
6008	庚申塔	門川町加草大迫	猿田彦大神塔	安永7年(1778)	

大字庵川(7001～)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	備考
7001	庚申塔	門川町大字庵川西			
7002	庚申塔	門川町大字庵川西			
7003	石碑	門川町大字庵川西	實盛様石碑		
7004	庚申塔	門川町庵川西	猿田彦		

大字川内(8001～)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	備考
8001	庚申塔	門川町大字川内三ノ瀬字コモ原	奉拝猿田彦命	安永8年(1779)	
8002	庚申塔	門川町大字川内三ノ瀬字駒原	奉拝猿田彦命	安永8年(1779)	
8003	庚申塔	門川町大字川内三ノ瀬字大原	奉拝庚申二世安楽長	天明1年(1781)	
8004	庚申塔	門川町大字川内三ノ瀬字大原	奉拝庚申二世安楽長	宝暦5年(1755)	
8005	彫像	門川町大字川内三ノ瀬字市ノ原		安永9年(1780)	
8006	庚申塔	門川町大字川内三ノ瀬字市ノ原	奉拝庚申二世安楽長	天明1年(1781)	
8007	庚申塔	門川町大字川内三ノ瀬字赤木	猿田彦大神	安永9年(1780)	
8008	石塔	門川町大字川内三ノ瀬字赤木	五輪塔	不明	
8009	庚申塔	門川町大字川内三ノ瀬字赤木	猿田彦大神	明治15年(1882)	

3. 指定文化財

区分	内容	指定区分・指定年月日	所在地	摘要
記念物	史跡 1 庵川窯跡 2 門川町古墳1号 3 門川町古墳6号	町・59.4.19 県・11.7.17 県・11.7.17	庵川西字皿山田 門川尾末1572-1 門川尾末2614	(3002) 消滅(1002) 古城古墳 (1001)
	天然記念物 4 門川のキンモクセイ 5 カンムリウミスズメ 6 庵川露頭	県・17.6.23 国・50.6.26 町・61.2.25	小松6896 ピロー島 庵川西字和田	児童公園壁面
	名勝 7 乙島(島)	県・32.12.15	乙島9100	
民俗文化財	8 白太鼓踊 9 門川神楽	町・59.4.19 町・59.4.19	小園 本町	分布図には未記入 分布図には未記入
有形文化財	10 薬師如来像(木造)	町・59.6.29	中村 受	彫刻 永願寺元寺

III 主要遺跡概説

1. 門川城 (1003)

大字門川尾末字城山・城屋敷

城屋敷地区の集落背後に東西に横たわる丘陵地帯の西端に突出した独立の小丘地を城取りしている。この丘陵一帯は城山といい、城屋敷という地区名と共に城館に関わることは明らかである。また城山の南東の斜面の一帯を土橋といい、北東の斜面の1部に室屋敷という小字名が残っている。五十鈴川にそそぐ支流でこの一帯を流れる水路を府内川といっている。その他興味深い地名が多いところでもある。城は、高さ40m程の丘地で三方は水田によって囲まれている。東は城山に接するが、ここは堀によって切られている。今回の調査でこの城山にも堀切が確認され(1004)、門川城の防御のために東側の丘陵に注意を払っていることがわかった。まわりの水田はいわゆる“ぬかり田”で現在でもこの水田は腰まで沈むといわれ、沈下防止に下に板が埋設してあるとのことである。そのため、この城は1度も落ちたことがないと伝えている。

この城は、米良四郎右衛門の居城と伝えられている。この地に城が開かれた年代は不明であるが、文明年間には米良氏が城主となったといわれる。

門川城の南西にやはり東西に長い丘陵がのびているが、現在では、小園から中山へ抜ける県道で寸断されている。この丘地の西端部に石塔群がある。板碑・五輪塔が、半数は埋没した状態となっている。墨書きが多い。見える範囲で年代を調べたところ元龜三年(1572年)の墓碑名のあるものがあつた。この石塔群のあるところが福寿寺跡であり、現在は大師堂がある。

2. 新城 (1005)

大字門川尾末字新城

五十鈴川南岸の日向市と境を接する標高120mの山地にある。範囲は東は門川側の分蔵から日向市へ抜ける“長谷越え”と呼ばれる旧道が通る堀切りまで、西は山地が分蔵の平野に望む斜面までである。南は日向市に入り、谷に向かって突きでたいくつかの山陵上の平面部の端を堀切って、外からの侵入を防いでいる。かなり規模の大きいもので東も西も南も念入りに堀切を構え、北からの侵入者に対しては谷筋に土塁を幾重にも構えている。この城については、古文書等の資料には現われていない。築城年代については明らかでない。しかしもととあつた城に大規模な改修がされたとみられている。遺物は表採されていない。

図版 1



①門川城(1003)西からの遠景



②門川城虎口付近(東上より見る)



③門川城南西側空壕の現状



④門川城東側空壕の現状と壕西側土層面



⑤新城(1005)北からの遠景



⑥新城空壕(長谷越)の現状

3. 福寿寺跡 (1006)

大字門川尾末字小園

城屋敷から小園へ東西にのびる丘陵がある。小園から中山へ抜ける県道によって現在は寸断されているが、その丘陵上の平坦地は福寿寺とって、門川城主米良氏の菩提寺であったとされる。頂上からは、門川城はもちろん、城屋敷の平野部、五十鈴川まで一眺でき、立地としては城さいに適している。石塔群は西端にまとまっており、丘陵の東端の平坦面に参道のあった形跡があり、小さな祠がまつてある。中に先が三又にわかれた鉄の槍先が立ててあった。福寿寺が廃絶した後、米良氏の菩提寺となった法泉寺の縁起によると、米良氏代々の石塔は福寿寺跡と松尾の阿弥陀堂にあるとしている。この丘陵の西端の石塔群はほとんど埋没しているが、今後、石塔一基、一基についての詳細な調査によって、門川の中世の歴史が明らかにされると考える。

4. 南町遺跡 (1009)

五十鈴川南岸の古川、原山の一带を南町という。昭和63年から当地の区画整理事業に伴う発掘調査を実施している。遺跡発見のきっかけとなったのは、昭和58年に、区画整理に係る文化財の有無の照会を受けて、宮崎県文化課が事業地内の分布調査を実施したことによる。結果、土師器が数点、表採されたことが報告された。このことを受けて後、南町遺跡の扱いについては協議が行われ、昭和63年の着工にあたり、同年秋に発掘調査が実施されるに至った。以来、年度ごとに区域を定めて調査を実施している。縄文後・晩期の土器、及び、多量の石錘や、打製石斧、石皿、磨石、たたき石等が出土している。遺構は、砂地であるため明確に検出されていないが、南町地区の南端の微高地では、宮崎県文化課による発掘調査で黒色土の堆積が見られ、住居跡（縄文後～晩）、歴史時代の土坑（土師皿出土）が検出されている。

5. 落郷遺跡 (1012)

大字門川尾末字落郷

城屋敷地区の南側に広がる水田地帯の中、田淵に、古墳があったということを前々より聞いていたが、現在では耕地整理が進み、盛土は全くといってよいほどなくなっている。しかし、城屋敷遺跡 (1020) などでは、須恵器杯の破片が見つかるなど、古墳時代の遺跡がこの近辺にあることを伺わせた。この落郷・花畑一带は、田淵地区に比べて、大規模な耕地整理はされておらず、五十鈴川の洪積地であってやや微高地を形成しており、地下に遺構が残っている可能性は高い。

この落郷遺跡とした畑地は、やや盛り土状をしており、そこに雑木が茂っている。五輪塔の壊れたものが1～2基あり、祀られている。所有者の話によると、さわるたたるという禁忌があり、周囲は耕作されてもそこだけは残されたということであった。周辺の畑地の形状と合わせて見ると前方後円墳と考えられないこともない。隣地の方形の畑地から土師器を表採した。

図版 2



①福寿寺跡(1006)丘陵西側の大師堂遠景



②福寿寺跡北東から見る



③福寿寺跡石塔群現状

④福寿寺跡紀年銘のある板碑のひとつ(墨書)



⑤南町遺跡(1009)南側の病院屋上より



⑥南町遺跡発掘調査風景(昭和63年11月)

6. 土橋遺跡 (1013)

大字門川尾末字土橋

昭和63年、南町遺跡の発掘中に、自宅の裏山から石斧が出土したということで、遺物が持ちこまれた。見ると縄文時代の磨製石斧であった。その山上には門川農業高校があり、同じ山地が、北東にのびており、その東斜面には横穴「門川町古墳6号(1001)」が立地している。また同じ山地には門川城に係わる堀切が存在しており、この土橋～城屋敷地区の北に横たわる丘陵地帯には縄文～中世にかけての遺跡群が存在しているとみられる。

7. 中山古墳 (1015)

大字門川尾末字土有

小園～中山を抜ける県道沿いの、五十鈴小学校に至る坂道の南側にこんもりとした丘地がある。この丘の藪の中に石棺の蓋石と思われる平たい石が放置されている。地元では“平石さん”と呼ばれ、落郷と同じくさわるとたたるという禁忌がある。そのためこの平石が地表にむき出しになって後は、現位置を移動してはいないと思われる。この丘地は前方後円墳かと思われる。遺物は見つかっていない。

8. 永願寺元寺石塔郡 (2001)

大字加草字中村受

永願寺は、江田城主であった草野大膳という人物が創建したと伝えるが、明治28年に、現在の加草の丘地に寺を移転させるまでは、中村受にあって真言密教の霊場として繁栄したという。背後の元山に至る山中、および寺跡のある丘の南東側の平地、南西下の平地の3ヶ所にわかれて石塔群が見られる。創建時にかかわるものはなく、調査できた範囲で最も古いものは、大永3年(1523年)、最新のものは、元禄3年(1690年)であった。境内は、昭和62年に薬師堂を立てかえた際に掘削を受けているため、遺物は発見されなかった。しかし縁起によると、十二坊を有する広大な寺城があったとされており、今後、調査を続けることによりその様相が明らかにされると考える。



①落郷遺跡(1012)



②城屋敷遺跡出土遺物(右一点)
落郷遺跡出土遺物(左二点)



③土橋遺跡(1013)



④土橋遺跡出土石斧



⑤中山古墳(1015)



⑥中村遺跡出土土器(門川町史より複写)

9. 中村遺跡 (2003) 大字加草字中村

この遺跡は、鳴子川の南岸にあって、川に向かって張り出した台地状に立地している。門川町内でも、この台地は、遺跡の立地として好条件を備えている。かつて、中村地区の公民館敷地内で、完形土器を出土している。弥生時代後期～終末にかけての土器と思われる。今回の調査でも、公民館周辺の畑地に土器の散布をみた。

10. 江田城 (2006) 大字加草字枝ほか

この城は、門川町の北部の丘陵地帯の一角に鳴子川、丸山川の二つの河川にはさまれて屹立する自然の要害である。この城自体は文献に登場することはないが、加草の永願寺に伝わる縁起によると草野大膳という人物の城であったとされ、平安時代からこの地の支配に江田城が関与していたことがのべられている。年代的には問題もあるが、地域的に国境地帯の最前線にあって、古くから重要な役割を果たしていたと考えられる。

標高48.1mの山上にかなり広い平坦地がある。この曲輪につづく斜面に横堀、縦堀が設けられており城の中心部とみられる。この曲輪に対立して北西部にもう一つの曲輪が存在し(標高42.6m)、そこに至る尾根づたいに、堀が二つ横切っている。曲輪や堀などからは、今のところ遺物は採集されていない。

11. 庵川窯跡 (3002) 大字庵川字皿山田

庵川地区に伝わる伝承に、朝鮮焼とシンニョム・カンニョムの2人の陶工の話がある。延岡領主であった高橋元種が、豊臣秀吉の朝鮮侵略に参戦した時、朝鮮から陶工を連れ帰り、庵川の地で、窯を開かせたという話で、その陶工がシンニョム・カンニョムと言い、見事な焼き物“朝鮮焼き”をつくっていたという。この朝鮮焼だという陶器は地元庵川の旧家にいくつか伝えられている。しかし、流行病で2人はなくなり、その後、誰も同じような焼き物につくれなかったということで話は終わるのだが、この伝説と現実に庵川に残る窯跡との関連は、明らかでない。この窯跡は、昭和47年に発掘調査が実施された。遺物は、磁器が主体で、茶碗や徳利、皿、鉢、急須などがある。緑釉のものが多く、前にも述べたように辰砂による赤色の破片が数片みられる。また焼台などの焼道具がかなり多量に出土している。製品(遺物)は、かなり高い技術により作られた高級なものである。一般庶民向けの製品でないことだけは確かである。また伝世品の朝鮮焼とは全く違うものであった。皿の底に「肥後宇土郡…」と書かれているものがあるので、肥後から陶工が来たとも考えられ、いわゆるシンニョム・カンニョムの伝説とは無関係かとも考えられる。

いずれにせよ、昭和47年の調査で発掘された遺物については、今年度より整理をはじめたばかりなので、今後の研究の成果をまたねばならない。

図版4



①鹿川窯跡現状(3002)



②鹿川窯跡出土遺物(底に文字書のある大皿)



③鹿川窯跡出土焼台等焼道具類



④辰砂による赤色磁器破片



⑤鹿川窯跡出土遺物(中皿)



⑥鹿川窯跡出土遺物(小鉢)左2点
⑦妙覚寺跡表探磁器破片 右1点

12. 妙覚寺遺跡

大字川内字赤木

この地には上井野の勝蓮寺の末寺で妙覚寺という寺があった。今は御堂があり、中に江戸時代に製作された日蓮上人の像が安置されている。

この御堂の前面の参道とその周辺から陶磁器の破片等を採集した。その中の一片が、庵川窯跡(3002)出土の磁器の一片と類似する文様であったので、興味をひかれた。庵川窯跡製の磁器は現在、伝世品がない。出土品はかつて朝鮮焼として伝世され庵川の旧家にあったものとは全く異っている。このような形で庵川窯跡出土のものに近い遺物と出会うことはおどろきであった。今後は町内の遺跡分布調査にあたっては近世陶磁器類についても特に注意を払っていかなければならない。

13. 城畑遺跡(3004)

大字庵川西字城畑

庵川西地区の丘陵上の平坦地に立地する遺跡である。陶磁器の小破片が数多く見られる。南半分は、以前庵川コミュニティセンターがあったが、現在門川町総合福祉センターとなっている。コミュニティセンター建設時に既にかなり掘削を受けていたようである。北半分の畑地には、まだ何らかの遺構が残っている可能性がある。今後の調査を期待したい。

14. 笠原遺跡(4003)

大字川内字笠原

五十鈴川中流域に突出した丘陵の先端の斜面にこの周辺で採取されるはい石と呼ばれる石材をくりぬいてつくられた石棺(舟型)がある。周辺には他に遺物は見つからなかった。少し斜面を上ったところに盛土高まりがみられる。

15. 江子日向平遺跡(4007)

五十鈴川支流の三ヶ瀬川を蛇行しながらのぼると川に向かったつき出た小丘陵がいくつかみられる。この遺跡もそういう丘陵の端に立地する。現在は椎茸の乾燥施設が建っている。この施設をつくる時造成時に石斧が2点出土している。

16. 赤木遺跡(4012)

赤木神社の下というだけで出土地は不明だが、妙覚寺跡や赤木石塔群の付近で磨製石斧が出土し、「門川町史」に紹介されている。

図版 5



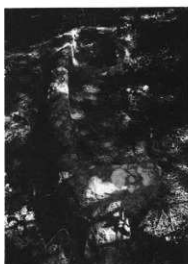
①城畑遺跡(3004)



③江子日向平遺跡(4007)現状



⑤妙覚寺跡(4006)



②笠原遺跡(4003)石棺



④同出土石斧



⑥赤木遺跡(4012)出土石斧

IV 発掘調査

IV 発掘調査

調査は、平成3年度において2ヶ所実施した。庵川地区（A～E地点）と南町遺跡（KH地点）である。発掘調査の方法は、トレンチ法およびグリッド法によって実施し、現状測量と写真撮影を行った。ここではその概況を報告する。

1. 庵川地区（A～E地点） 門川町大字庵川^{みだし}角石^{にしろこ}、西迫^{やま}、山の田^た、右松^{みぎまつ}

この調査は、遠見半島におけるゴルフ場開発計画策定に伴う文化財の有無について、門川町長から照会があったため実施した。この調査に先立って、平成2年度において、宮崎県文化課の指導により遺跡の立地の可能性のある地点を5ヶ所選定し、調査対象区域とした。調査期間は平成3年12月9日～12月13日までである。表面観察と試掘（トレンチ法）を実施した。1ヶ所につき3本ずつ、幅1m、深さが平均50cmのトレンチを掘った。調査の結果、遺物の散布は見られなかった。表土層はかなり薄く、その下層は地点によって若干の差はあったが、黄色・赤色の粘質土が10～50cm堆積しているのがみられた。どの地点でも岩盤がすぐにあられた。遺物はなく遺構もみられなかった。



第1図庵川地区調査範囲位置図（5万分の1）

図版 6



①A地点



②第1トレンチ土層状況



③B地点



④第1トレンチ



⑤第2トレンチ



⑥第3トレンチ

図版 7



①D地点



②第1トレンチ



③第2トレンチ



④第3トレンチ



⑤E地点、トレンチ状況



⑥トレンチ状況

2. 南町遺跡 (KH地点)

門川町大字門川尾末字古川ほか

この調査は、土地区画整理事業に伴う個人による表土の移動により、地下遺構への影響が懸念される地点について発掘調査を実施したものである。調査面積は約340㎡である。この調査を実施する以前に同じ地点で、試掘を行った経緯があった。試掘では、縄文晩期の土器片などがみられた。

平成4年3月、この地点にパワーショベルがはいっていたので、見てみると広さが10㎡程を深さ1mほど掘削しており、その一角に完形に近い量の土器片が露出していた。土砂が移された先にも土器片がかなりみつかった。そのため、この土砂の移動をしばらく見合わせてもらうよう協議し発掘調査を実施した。調査期間は平成4年3月16日～31日までであった。

遺跡の年代は、縄文後期から晩期を主体とする。特に後期の磨消縄文土器は、南町遺跡においては、それ以前の調査では見られないものであった。

遺構は、砂丘上に立地する遺跡であるため、検出は困難である。土器の取り上げの際に気づいたが、土器の下部に小円礫が比較的まとまって出土することがあった。しかし、下層に含まれる砂利との区別は明確でない。また、人頭大の石がほぼ等間隔に並んでいる状況もみられた。

主な出土品としては、復原可能な甕が5点くらいとテンパコに約10箱の土器片、石錘などがある。

この調査では、磨消縄文の凹線文土器が出土した。このことは、当地域の砂丘上の縄文時代の遺跡の時期や分布を知るうえで大変重要である。

調査の詳細については、他の調査地点と合わせて報告する予定である。



第2図南町遺跡位置図 (5万分の1)



第3図南町遺跡KH地点の位置

図版8



①KH地点



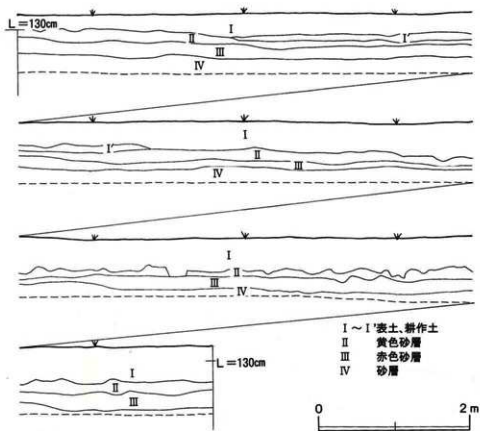
②掘削地点土器出土状況



③磨消縄文土器出土状況



④掘削地点土器出土状況



第4圖南町遺跡KH地点土層圖(1/60)

圖版9



KH地点南側土層

図版10



①小円礫出土状況



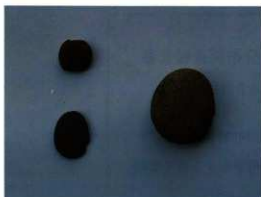
②石製品(玉)出土状況



③石錘出土状況



④出土土器 1



⑤出土石器・石製品



⑥出土土器 2

門川町遺跡詳細分布調査報告書

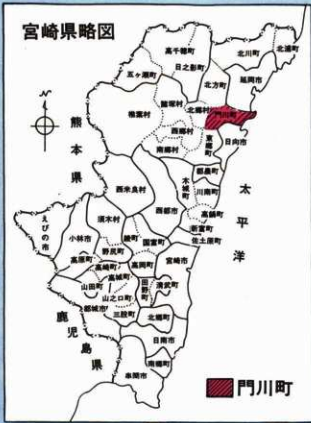
平成6年3月31日

編集・発行宮崎県門川町教育委員会

宮崎県東臼杵郡門川町本町1丁目1番地

印刷 ヤマシタ印刷

宮崎県東臼杵郡 門川町内遺跡・文化財分布地図1994



凡例

○	指定文化財
○	遺跡範囲 範囲の不明なところは ○で示している
□	石碑、石仏、祠堂等

記号

—	国道路	●	町役所	○	神社	—	石	—	府	—	段
—	市道	○	町役所分庁舎	○	寺院	—	—	—	—	—	—
—	町道	○	公民館	○	塔	—	—	—	—	—	—
—	町道	○	公民館	○	塔	—	—	—	—	—	—
—	町道	○	公民館	○	塔	—	—	—	—	—	—

縮尺 1:25,000